慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	開会の辞
Sub Title	
Author	田中, 明(Tanaka, Akira)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2007
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.99, No.4 (2007. 1) ,p.782(176)- 783(177)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小特集 : 東アジア共同体とヨーロッパ共同体の比較研究
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20070101-0176

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

開　会　の　辞

田　中　　明

慶應義塾経済学会コンファレンス「東アジア共同体とヨーロッパ共同体の比較研究」の開催にあたって，本学経済学部特別招聘教授の池先生と歩先生，ならびに御来場頂きました諸先生方に歓迎と感謝の言葉を申述べるようにと，本コンファレンスの企画者の方から私に申入れがございました。本来このような役割は慶應義塾長もしくは経済学部長が果すべき仕事ではないか，と考えまして一旦は御辞退を申上げたのでございますが，よく考えてみますと，本コンファレンスはこの数年来，日中韓の諸国民の間において深刻な問題となって参りました，歴史認識の問題を検討しなおすことをも意図して設定されたものでありますから，このような問題をたんに非日常性次元の理論的な問題としてではなく，同時に日常生活次元の実践的な問題としても語り得るためには，慶應義塾長も経済学部長も，少しく年齢が御若すぎるように思われますので，私なりに果すべき役割もあろうかと再考いたしまして，僭越乍らこの御役目を引受けさせて頂きました次第でございます。

ところで私は，一九四一年に慶應義塾に入学をいたしましたが，当時の幼稚舎長は福沢諭吉の外孫に当る清岡暎一先生でありました。清岡先生は英文学者でプロテスタントのクリスチャンでありますから，それだけでも当時は危険な思想の持主ではないかと疑いの目をもって見られていた所へ，先生が日米開戦の前後に幼稚舎の高学年の生徒を前にして行われた講話のなかで，アメリカの科学者でもあり企業家でもありましたT. Edisonの事蹟に関説し，「科学の世界に国境はない，君達は太平洋の架け橋となれ！」と述べられた為に，幼稚舎の内外からさんざんに攻撃を受けられて遂に病臥されるにいたったのであります。どうしてそのようなことになったのか？ 一九四一年の大日本帝国においては日本の殆んど全ての国民が，Max Weberのいわゆる“Zaubergarten”のなかに，呪術的精神構造が支配している伝統主義的社会の体制のなかに搦め捕られていたからであります。しかしながら，二〇〇一年以降過去数年間の日本の社会の動向を省察いたしますならば，日本国の指導者は，日本の国民を再び一つの新たなZaubergartenのなかに封じ込めようとしているように見受けられるのであります。このようなときにわれわれに求められることは，もっと科学的であれ，ということであります。その場合に科学とは何かと申しますと，十七世紀の科学革命以後の近代の西洋科学ではなくて，近代の西洋科学を特殊的なものとして相対化しうるような現代の普遍科学を意味するものでなければならない。このことは約半世紀前からJ. Needhamが――中国科学史の世界的権威でありましたJoseph Needhamが強調し力説してきたところなのであります。ということになりますと，もっと科学的であろうとすれば，われわれはもっと国際的にならなければなりません。たんに太平洋の架け橋になるばかりではなくて，太平洋ほどに広くはないけれども太平洋よりも深

く，日本と韓国，日本と中国を分け隔てる深い溝を乗り越えるための努力が要求されるのであります。当面の歴史認識の問題に関して言えば，日中韓の諸国民が，われわれの近代史や現代史の諸事実や諸事件をめぐって，共通の認識を持つことを妨げている原因が，過去の歴史のなかにあることは疑問の余地もないところでありますけれども，同時にまたその反面においては，日中韓の諸国民に共通な認識を可能ならしめる基盤も過去の歴史のうちに秘められているのであります。この問題に関連して，中韓両国においては脱亜論の主唱者として知られる福沢諭吉が，一八七五年に刊行いたしました『文明論之概略』に言及することにいたしましょう。丸山真男が福沢諭吉の唯一にして最高の理論的な著作と看做したこの著作は，理論的な著作としては論理的に矛盾をはらむ未完の労作でありますが，にも拘わらず，この著作が提起して，解決することには成功しえなかった問題はきわめて重大なものでありました。それは要するに，西洋文明受容後の日本文明ないしは東洋文明は，如何にあるべきかという問題をはらんでいたのであります。福沢自身，十九世紀のイギリスの経済学と歴史学，フランスの社会学と歴史学，総じて言えば，西欧近代の社会科学と歴史科学を踏まえてこの著作を執筆したのでありますけれども，『文明論之概略』の結論の部分に当る巻之六第十章のなかで次のような主張を提示することができたのであります。彼は述べております，「今の亜米利加は元と誰の国なるや。…今の亜米利加の文明は白人の文明なり，亜米利加の文明というべからず。…欧人の触るる処にてよくその本国の権義と利益とを全うして真の独立を保つものありや。ペルシャは如何ん，印度は如何ん，シャムは如何ん，ルソン，ジャワは如何ん。」そして最後に福沢は大清帝国の危機的な状況に言及したのちに，「我日本も東洋の一国たるを知らば，たとい今日に至るまで，外国交際に付き甚だしき害を蒙たることなきも，後日の禍は恐れざるべからず。」と殆んど予言にも等しい警告を与えていたのであります。

少なくとも明治七～八年に著された『文明論之概略』においては，東洋の諸国民・諸民族に共通な課題を探求しようとする志向も見出されるという，事実はまた事実として過少に評価さるべきものではないのであります。しかしながら，同時にまたその反面においては，『文明論之概略』が執筆されてから二十年後の日清戦争にさいして，勝海舟伯がこの戦争は大義名分のない「無名の師」であると断じたのに，福沢諭吉は日清戦争を「文明」の「野蛮」に対する「義戦」と称して擁護したということも看過されてはならない。わずかに二十年・一世代のうちに，なにゆえに，日本の社会と福沢の思想に，いかにして，重大な変化が生ずるに至るのか？ このように重大な問題については，日中韓の研究者・歴史学の専門家が，協力しながら真剣に厳密に考究をつくして，その研究の成果が広く民衆に供与され，未来の世代の教育の素材として活用される方途と手段が探求さるべきでありましょう。過去に対する省察を缺くときは未来に対する展望も生じえない，ということを最後に指摘いたしまして，開会の挨拶の結びのことばに替えますことを御許し頂ければ幸甚に存じます。

（名誉教授）